

名もなき証人の役割 ——小川国夫『或る聖書』の複層的構造の一考察——

櫻井 遼太

I. はじめに

小川国夫（1927-2008）は聖書の世界を舞台にした物語やキリスト教に関するエッセーを多く執筆しているキリスト者作家である。この点は小川と同じく「内向の世代」に数えられる古井由吉（1937-）や黒井千次（1932-）らの作風と一線を画している。また、小川はカトリックとプロテスタント両派が18年かけて翻訳した『新約聖書共同訳』（日本聖書協会、1987年）の編纂にあたり国語委員を務める経歴を持つなど、作家以外の分野でも聖書に関わる仕事を積極的に担っている。この一方で、小川の作品は聖書に関する物語やエッセーにとどまらず、自伝的小説『悲しみの港』（朝日新聞社、1993年）が第5回伊藤整文学賞を受賞するなど精力的な作家活動がみられる。1970年代前後に文壇の第一線に登場して以降、聖書や小川自身の故郷に題材を求めながら、小川の作品は広い読者層を獲得している。

このような小川の作品のうち、『或る聖書』（筑摩書房、1973年）は聖書を題材とした代表的な作品である。物語は冒頭で青年ユニアがキリストをモチーフとする〈あの人〉から召命を受けることから始まるが、むしろ小説全体はユニアの召命の揺らぎを描くことに集中している。そして、物語の後半において〈あの人〉が処刑された後でユニアは〈あの人〉に対する信仰を失いかけるが、ここで注目されるべき重要な要素が小説末尾に登場する名もなき証人である。

これまで小川文学を代表するこの小説の解釈は青年ユニアの召命物語という大筋で論者に一致がみられる。例えば、山形和美は本小説を「ユニアの「召命」のあとの変転をめぐって展開する物語」とした上で、小説の構造に関する研究を進

めている（山形、1998年、19頁）⁽¹⁾。また、勝呂奏は本小説が新約聖書を骨格とする点に着目して「全く自律的な架空の作品時間ではなく、歴史との接点にリアリティーの根が張られている」として小説内の時代や地理を聖書と関連させて再構成している（勝呂、1998年、24頁）⁽²⁾。しかし、このような先行研究の中で小説末尾に登場する名もなき証人の役割やこの証人の役割を支える小説の構造は分析されていない。また、この証人の役割や小説の構造にはキリスト者作家としての小川の問題意識が反映されていることが考えられる。そこで、キリスト者作家としての小川の問題意識を明らかにして『或る聖書』と結び付けて論じることで本小説における重要な要素である名もなき証人の役割を考察できることが予想される。

そこで、本稿では『或る聖書』の執筆前後の時期におけるキリスト者作家としての小川の問題意識を整理して、『或る聖書』に登場する名もなき証人が小説の構造に支えられて果たす役割を論じたい。キリスト者作家としての小川の問題意識に着目し、「模索」という観点を用いることで本小説が構造的に持つ二つの層が浮かび上がる⁽³⁾。これを本稿では本小説の複層的構造と称する。この複層的構造に至る前提として、はじめにキリスト教文学研究の近年の動向や山形による類型と「模索」概念を整理する。次に、小川文学の特徴を小川の教会との関わりから捉え直すことで小川のキリスト者作家としての「模索」の考察に向けた批判的な視点を示す。そして、小川の「模索」が反映されている小説の複層的構造を分節化して、名もなき証人の役割を具体的に分析する。

本稿の目的は、本小説の複層的構造に支えられる名もなき証人の役割を明らかにすることである。この複層的構造はキリストの言葉のアフォリズム的な使用と〈あの人〉の否定的な像の前景化に分節化することができ、作中で〈あの人〉とキリストの関連を曖昧にさせる演出につながっている。また、名もなき証人がこれらの演出によって曖昧になる〈あの人〉とキリストの関連を明らかにさせる点で、本小説の複層的構造は証人の役割を引き立てている。これまでユニアの召命物語という解釈に研究の焦点が当てられてきた中で、名もなき証人による証しの

物語と読み解く新たな視点や作家の「模索」に着目することで明らかになる作品構造の捉え方を提示して、キリスト教文学として本小説が持つ意義の考察につなげたい。

II. キリスト教文学研究の近年の動向および山形による類型と「模索」概念

機関誌『キリスト教文学研究』第30号（日本キリスト教文学会編、2013年）は「現代におけるキリスト教文学の〈ミッション〉」を特集している。この特集では、遠藤周作（1923-1996）や三浦綾子（1922-1999）の小説における神や登場人物の描写とそれらの意義が論じられている。例えば、竹林一志は「現代におけるキリスト教文学のミッションの一つは、〈神を指し示す指〉たること（人々の目を神に向けさせること）であろう」とした上で、『氷点』（朝日新聞社、1965年）や『泥流地帯』（新潮社、1982年）にみられる神理解を分類している（竹林、2013年、39-50頁）。日本におけるキリスト教文学研究の基礎的関心はキリスト教精神が文学作品をいかに豊かにしているかという点に置かれている。そして、近年の研究動向には従来のように日本や欧米の文学作品を対象としながら、特にキリスト教文学が独自に持つ文学的意義に関心の高まりがみられる⁽⁴⁾。

例えば、シャーウッド・アンダーソン（1876-1941）の『オハイオのワインズバーグ』（*Winesburg, Ohio*）に描かれる信仰者や牧師の分析を通じた人間の生き方の考察に関する論考が挙げられる（森本、74-83頁）。森本は「性によって象徴される世俗的ながら人間的な要因と神や聖なるものとの融和の追求」を同小説に読み解き、キリスト教文学にみられる人間を捉える視点の意義を考察している（森本、82頁）。また、ロジャー・パルバース（1944-）の『神のいらぬ時代のバイブル・ストーリーズ』（*Bible Stories in the Times God is Not Needed*）にみられる無神論や作品分析を通して、新しいキリスト教文学の在り方を検討する論考もある（岡田、91-105頁）。岡田は同小説で神を抜きにして聖書の物語が再構成されている点について「パルバースの「神のいらぬ時代のバイブル・ストーリーズ」は、「神」を描かないことで、逆に、人には神という絶対的存在が必要であるこ

とを浮かび上がらせている作品なのである」と述べている（岡田、103頁）。これまで欧米文学を対象とする研究では欧米の研究動向にならい神学との「接面領域」(Interface)として文学作品が論じられており、特に近年はキリスト教文学の独自の文学的意義に注目が集まっている⁽⁵⁾。

一方、日本文学を対象とした研究では三浦文学にみられる伝道の在り方に関する論考が挙げられる（竹林、2016年、84-97頁）。竹林は『塩狩峠』（新潮社、1968年）や『愛の鬼才』（小学館、1983年）に関して「三浦が、その小説において、どのようにして読者を聖書へと導こうとしているかということ」を考察している（竹林、2016年、94頁）。芥川龍之介（1892-1927）の『神神の微笑』（春陽堂、1922年）や遠藤周作の『沈黙』（新潮社、1966年）をはじめ、日本の近現代文学には日本文化ないし日本社会と異質なものとしてキリスト教を取り上げる小説が多いが、キリスト教文学研究では文学作品とキリスト教の関連を積極的なものとして捉える試みがみられる。例えば、佐藤泰正は「〈ひらかれた文学とひらかれた宗教の統合を求めて〉という課題」を設定して、人間存在の根源へ向けられる「〈垂直的にひらかれた眼〉」がキリスト教文学において成立する可能性を主張している（佐藤、284-300頁）。

これらの研究は作家の伝記に依拠しやすい点や歴史的ないし社会的文脈における文学作品の考察が弱い点に課題がみられる。しかし、キリスト教文学研究に独自の観点を設けることで議論の焦点が明確になり、キリスト教文学が有している価値や意義を顕在化させると考えられる。この点について、山形はキリスト教文学をキリスト者の書いた文学と定義して議論の焦点を次のように類型化している。

(1) キリスト教徒の作家として、

A. なにをどのように書くのか。

B. 読者をどのように考えるのか。

C. 教会・社会・体制との関係をどのように処理するのか。

- (2) キリスト教徒の読者として、
- A. 文学とキリスト教は関係がないと思う。
 - B. 文学とキリスト教は関係があるが、
 - a. 文学はキリスト教にとって代ったと考える。
 - b. 文学はキリスト教に奉仕すると考える。
 - c. 文学を文学として認めたくえて、最終的に文学をキリスト教的倫理・神学基準で判定すべきだと考える。
 - d. なによりも護教文学を重視する。

(山形、1986年、2頁)⁽⁶⁾

山形の類型はキリスト者作家という枠組みを設定しているものの、キリスト教文学の独自の論点を細分化している点に意義がある⁽⁷⁾。例えば、(1) Cは作家のキリスト教理解を教会や集会との関連から批判的に考察することを求めている。また、(2) Bは文学作品をキリスト教文学として論じる上で予想される論点を整理している。この類型は英文学を想定しているため、日本文学に直接適用するのは難しい項目も含まれているが、作家、読者、そして文学作品の関係を批判的に捉え直すとともに、文学作品と作家のキリスト者としての問題意識を並行関係で考察することを可能にする⁽⁸⁾。この点について、山形は「私たちは、和解への道がキリストによって聞かれたと解するのです。そして芸術作品のひとつひとつがその和解の成就へのきわめて人間的な模索であると思うのです」と主張している(山形、1986年、11-12頁)。アンドレ・マルローの考察を踏まえて、山形は作家が作品を通してキリストの福音と向き合う事態ないし状態を「模索」と称している⁽⁹⁾。やや理念的な概念であるが、「模索」はキリストの福音による促しが創作の背景にあることを明確にさせており、キリスト教文学の独自の観点として重要である⁽¹⁰⁾。そこで、本稿では文学作品における作家のキリストの福音と関わる問題意識を総称して「模索」と呼ぶこととする。

本稿は山形の類型と「模索」の観点をを用いて『或る聖書』を分析したい。これ

まで小川の伝記に関する研究や『或る聖書』の作品分析は多く試みられているが、キリスト者作家としての小川の「模索」に焦点を当てた研究はみられないからである。そこで、まず(1)の論点について小川文学の特徴と小川の教会との関わりに着目する。

III. 小川文学の特徴と小川の教会との関わり

1. 聖書を題材とする一貫した姿勢

小川は中期の短編集『逸民』(新潮社、1986年)の後記において、初期から取り組んできた小説のテーマを次のように概括している。

もう25年も前、私は将来書いて行くべき小説の流れを、3筋に分けようと決意した。第1の筋は、聖書の世界を拡大したり変形したりした物語の流れにしよう、第2の筋は、故郷大井川流域を舞台にした架構のドラマの流れに、3番目の筋は、実際の体験、交際、見聞に多少潤色を加えた私小説風の流れにしようということであった。そして、ほぼその通りになった。私は今でもこの3筋の流れに棹差している。

(小川、1991年、524頁)

「第1の筋」に該当する小説はキリスト教信仰の世界観を積極的なものとして展開している点で、他の日本のキリスト教文学とは趣を異にしている。例えば、日本のキリスト教文学には前章で触れた『沈黙』のようにキリスト教信仰を日本社会に異質なものと取り上げる作品が多い。この傾向はキリスト者作家以外の作品にも当てはまり、『神神の微笑』では霊の一人である老人がオルガンティノ神父に対して日本の霊の「造り変える力」により泥鳥須は敗北すると語る(芥川、120-141頁)。近現代詩の分野においてもこの傾向があり、金子光晴(1895-1975)の詩集『IL』(勁草書房、1965年)では特徴的なキリストの描写を通して日本におけるキリスト教信仰の困難さが示されている⁽¹¹⁾。

この傾向に対して小川文学では日本社会に異質なものとしてキリスト教を取り上げることは試みられていない。むしろ、小川文学の特徴はキリスト教信仰の世界観を積極的なものとして展開する点にある。この特徴について、山形は遠藤文学と比較した上で「血と土の問題は美しいほどに捨象されている」と指摘している（山形、1997年、7頁）⁽¹²⁾。「血と土」の問題、すなわち、日本社会と異質なものとしてキリスト教を取り上げることが遠藤文学の主要なテーマである一方で、小川文学にこの問題意識はみられない。小川文学は積極的にキリスト教信仰の世界観を表現する点で三浦文学と同じ系譜に位置づけられる⁽¹³⁾。しかし、小川文学は「第1の筋」に該当する小説の題材が一貫して聖書に求められる点で三浦文学と異なる。この特徴は小川の「模索」が聖書と深く結び付いていることを示唆している。次の発言に示されているように、小川は自身の信仰において聖書の言葉そのものを重要視する姿勢を示している。

復活に独自の深い意味を見いだしている人もあろう。それを疑っている人もあろう。復活はありえないと思う人もあろうが、私はそのいずれでもない。根本の考え方は〈聖書があればそれでいい。私の心の中には、聖書の記述どおりのことがあるだけで、それ以上でもそれ以下でもないから〉ということだ。 （小川、1995年、500頁）

「聖書があればそれでいい」とは、次節で述べるように小川が教会生活を通して聖書理解を培ったことを踏まえるならば、復活信仰が信仰共同体との交わりなしで成立するという意味ではない。この発言が聖パウロ女子修道会発行の雑誌記事であることから教員が読者に想定されていると言える。ここではキリスト者としての小川の関心が聖書と関連していることが強調されている。

聖書に対する小川の関心は「第1の筋」に該当する小説内で「聖書の記述どおり」と大差ない仕方で聖書が小説の主題と結び付けられて引用される点に反映している⁽¹⁴⁾。『或る聖書』における「模索」を検討する前に、特に (1)C の論点に

着目して小川の教会との関わりから小川文学の特徴を捉え直したい。

2. 小川と教会との関わり

小川と教会との関わりは1930（昭和5）年代に小川が静岡県志太地域のセブンスデー・アドベンチスト教会の土曜学校に出席し始めたことを端緒とする。小川の家系はクリスチャンホームではないが、当時尋常小学校3年生頃の小川は土曜学校で労働者の青年による熱心な旧約聖書の語りに興味を持ち、児童向けの聖書物語の読書も合わせて聖書の世界に親しんでいる。後年に小川は「再臨派のように、逐語的に聖書を受け取るべきかどうか、私は疑問に思うが」とした上で、土曜学校における教会員との交流を通して「聖書は歴史の書物ではなく、生身なまみの人間に常に現前しているものとなった」と述べている（小川、1995年、509頁）。

そして、尋常小学校5年生のときに小川は結核性腹膜炎と肺浸潤に罹り、療養のため2つ学年を遅らせており、このとき藤枝町鬼岩寺にある藤枝天主公教会（現・藤枝カトリック教会）に通い始める。求道生活の後に同教会で洗礼を受けたのは終戦後の1947（昭和22）年10月であり、小川は戦後の空虚感から一転して活発な教会生活を送る。勝呂は受洗後の小川の教会生活について「青年会に属し、その活動の主要な一人になった小川はレコード・コンサートの解説役を引き受けたり、教会月報『コロンバ』にたびたび投稿したりした」と述べており、教会活動の一環で神山腹生病院を慰問した際には戯曲の上演にも携わったと指摘している（勝呂、2012年、93頁）⁽⁴⁵⁾。小川は1950（昭和25）年4月に東京大学文学部国文学科へ入学した際には、藤枝天主公教会から大森カトリック教会に転籍して教会生活を続けている。「大学の文学部でも、私ほど出席しなかった学生は少なかったろう。私は学校を休んで、小説を書いた」と回顧するこの時期に、小川は教会の活動にも積極的に従事している（小川、1995年、27頁）。例えば、小川は慈善団体聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会に所属して、戦争のつめ跡が未だ色濃く残る東京で「アジア救済同盟」(LARA)の救援物資を戦争の被災者に届ける

活動に携わっている⁽¹⁶⁾。

このように小川は作家活動を始める20代に教会員の一人として積極的に教会の奉仕に励んでいる。「第1の筋」に該当する小説の執筆を決意するのはこの約10年後になるが、少年期から青年期にかけて小川と教会との関わりは着目に値する。なぜなら、聖書に対する小川の関心は教会における信仰者との交わりを通して芽生え、また、小川自身が教会員として教会生活を送っているからである。つまり、礼拝や青年会活動をはじめ、小川は教会を通して聖書に対する関心を高めたと考えられる。この観点から小川文学を捉え直すとき、小川のいう「聖書の世界を拡大したり変形したりした物語」に含まれる「聖書の世界」とは学問の対象や知識としてだけではなく、小川自身の教会生活を通じた聖書理解が背景に考えられる⁽¹⁷⁾。

この聖書理解は小川文学においてキリスト教信仰の世界観を積極的なものとして表現することにつながっていると考察できる。さらに、小川の聖書理解は小川の「模索」が教会ないし教会生活に基づくことが考えられる。このため、『或る聖書』の分析にあたり、小川の教会との関わりを含めて小川の「模索」を考察する必要がある。

そこで、次に『或る聖書』の執筆時期のエッセーと対談を参照して、特に教会と聖書に関わる小川の問題意識に焦点を当てて同小説における小川の「模索」を考察したい。

IV. 『或る聖書』における小川の「模索」

『或る聖書』の他に「第1の筋」に該当する小説は『枯木』（青銅時代社、1957年）を端緒として『囚人船』（青銅時代社、1959年）や『罪の赦し』（青銅時代社、1960年）、『海からの光』（南北社、1968年）が挙げられる。そして、これらの作品では作中に引用される聖書の言葉を小説の主題と結び付けて捉えることができる。例えば、『囚人船』では想像上の恐れが王や皇帝の権力に対する恐れを凌駕するときに起こる人々の内面の変化がテーマであり、作中では「〈皇帝のものは

皇帝に帰り、神のものは神に帰る」とマタイによる福音書のキリストの言葉が引用されている（『囚人船』、2014年、347頁）。

これらに対して『或る聖書』では聖書の引用そのものが頻出しており、聖書の特定の言葉を小説の主題と結び付けて捉えることが難しい。これは『或る聖書』における小川の「模索」に関わると考えられるが、小川自身同小説における試みを次のように述べている。

昭和44年春、《展望》から原稿依頼があって、私は《或る聖書》を書き始めた。以上述べて来たような仕事の元になる部分、つまり、〈あの人〉そのものを描き出そうと思った…… [略] ……ただ、〈殺すなかれ〉〈殺すものは殺さるべし〉〈たとえ殺されても……〉とつながって行く連鎖を断ち切るための示唆をどこかで得ようとして、考えをさ迷わせた思い出が、まだなまなましい。 (小川、1995年、176頁)

「〈あの人〉そのものを描き出そうと思った」と『或る聖書』における試みが明確に語られており、また、この試みが「連鎖」と表現されるキリストの言葉がなす連鎖を断つことと密接に関わることが示されている。そもそも、『枯木』以降「第1の筋」に該当する小説で〈あの人〉という人物に重ねてキリストが描かれている⁽¹⁸⁾。また、先行する小説を経て『或る聖書』では最も〈あの人〉とキリストが重ねて描かれていると言える。このことから、『或る聖書』における小川の試みとは〈あの人〉をキリストとして描くことと考えられるが、作中で両者の関係はキリストの言葉のアフォリズム的な使用によりむしろ曖昧にされている。この点は小川のいう「連鎖」が具体的にみられる次の場面に表れている。

——コイラよ、私たちは万人のために闇に住む者となった。神は〈殺すな、殺す者は殺されるだろう〉といっているから。

——私は殺しませんでした。

——殺しはしなかったが、これから殺す者になるのだ。

——……………。

——たとえ殺され闇をさ迷うことになろうとも、殺さなければならない。

(「その血は我に」、196-197頁)

この場面で「コイラよ」と語りかける人物は荒野衆会という武力行使集団の指導的地位にある荒野の声^{ゴーズミロイ}と呼ばれる人物である。この荒野の声の発言にある「〈殺すな、殺す者は殺されるだろう〉」は「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている」(「マタイによる福音書」、5章21節)というキリストの言葉の引用であり、アフォリズム的に使用されている。これは「〈殺すな、殺す者は殺されるだろう〉」というキリストの言葉がコイラに訓戒を与える文脈で引用されている点に表れている。さらに、キリストの言葉が「たとえ殺され闇をさ迷うことになろうとも、殺さなければならない」という荒野の声の主張を有用なものとするために引用されている点にも表れている。このように、『或る聖書』ではキリストの言葉は〈あの人〉とキリストの関係を描き出すことに用いられていない。むしろ、〈あの人〉以外の人物の発言においてアフォリズム的に使用されることで、キリストの言葉は〈あの人〉とキリストの親和性を低めて〈あの人〉をキリストとして描くという演出を妨げている。このことから、小川のいう「連鎖」はキリストの言葉のアフォリズム的な使用を指し、これにより作中では〈あの人〉とキリストの関係が曖昧にされていると言える⁽¹⁹⁾。そして、小川によるこの「連鎖」を断ち切る試みの中で〈あの人〉が描き出されることが考えられる。

この「連鎖」は『或る聖書』の後半に集中してみられるが、〈あの人〉とキリストの関連を明らかにする名もなき証人の登場により断たれる。このことから、『或る聖書』にみられるキリストの言葉のアフォリズム的な使用は名もなき証人の役割を支えるための小説の構造と分析できる。そして、この背景には『或る聖書』における小川の「模索」があると考えられる。なぜなら、小川は『或る聖

書』執筆前後の時期に聖書の用法に関してしばしば言及しているからである。例えば、小川は1971年に行われた吉本隆明（1924-2012）との対談で吉本の著書『反逆の理論——マチウ書試論』（現代文学社、1954年）を批判するにあたり、次のようにカトリック司祭の発言を引用している。

僕はあるときカトリックの司祭と話したことがあるんですけども…… [略] ……キリストのある言葉をアフォリズムとして抜き出して、絶対の普遍妥当性があるというふうに説教するのは、自分は反対だと、やはり、いちばん大事なことは、教会は福音書でもって、キリストの人生はどうであったか、そういうことを復元できるかできないかということが、非常に問題だと言っておりましたね。

（吉本、小川、1971年、254頁）

小川は聖書を扱う吉本の著書においてキリストを捉える視点が欠如していることを指摘して、カトリック司祭の提起する問題と重なることを主張している（吉本、小川、1971年、254頁）。つまり、小川は聖書がキリストと切り離されて読まれることを問題としており、特に聖書が人生訓ないしアフォリズムのように用いられることを取り上げている。これは2度目の対談でも論点となり、このとき小川はキリストの言葉が教条的に解釈されることで聖書が「瑣末なアフォリズムの集積みたいなもの」になると小川自身の言葉で強調している（吉本、小川、1998年、78頁）。この聖書の用法と対照させて小川はキリストを把握することと聖書の不可分な関係を強調しており、1976年に行われた鳥尾敏雄（1917-1986）との対談において聖書を読む上でキリストの生涯を把握することに最大の関心があること述べている⁽²⁰⁾。

つまり、『或る聖書』にみられるキリストの言葉のアフォリズム的な使用にはキリストと切り離された聖書の用法が重ねられていると考えられる。換言すれば、〈あの人〉を描き出すことを通したキリストを指し示す聖書の用法の探究が

『或る聖書』における小川の「模索」と言える。この小川の「模索」には前章で検討した教会生活を通じた小川の聖書理解が関連している。例えば、小川は自身の聖書観が教会と無関係に理解されるべきではないとした上で、信仰上の関心が聖書を通じたキリストの把握に置かれていることを述べている（小川、1981年、141-143頁）。また、小川は『或る聖書』を解説する中で「人間と神との距離をいかなる形で埋めていくか」という問いがあることを述べている（森川、諸田、小川、69頁）。聖書を題材としたキリスト者としての問題意識が明確に打ち出されており、問いの立て方と方向性に教会生活の影響が考えられる⁽²¹⁾。

〈あの人〉を描き出す役割が名もなき証人に与えられていることから、『或る聖書』における小川の「模索」の力点は証しに置かれていると考えられる。そして、本章で言及した『或る聖書』にみられるキリストの言葉のアフォリズム的な使用は名もなき証人の役割を支える小説の構造に要請されたものと分析できる。次章ではこの小説の構造を分析するにあたり、名もなき証人により〈あの人〉とキリストの関連が明らかにされる相手であるユニアを取り上げて、特にユニアの召命の揺らぎについて『或る聖書』の舞台設定とともに考察したい。

V. 『或る聖書』の複層的構造と名もなき証人の役割

1. ユニアと『或る聖書』の舞台設定

『或る聖書』に登場するユニアは、名もなき証人により〈あの人〉とキリストの関連を明らかにされる人物である。斎藤和明は「『或る聖書』の主題は、信ずるという人間的行為がいかに論理を超えて曖昧であるか、信ずる行為の持続がいかに可能か、困難な使命への不安と懐疑を超えることが可能かという問題提起である」と指摘しており、ここで想定されている人物がユニアである（斎藤、77頁）。ユニアは「第1の筋」に該当する小説において主要な視点人物の一人であり、『或る聖書』以前の作品ではユニアの〈あの人〉に対する信仰の揺らぎが小説全体を通して描写されることはない。斎藤の指摘をはじめ、これまで『或る聖書』の分析ではユニアの信仰の揺らぎに焦点が当てられてきたが、本小説を「模

索」の観点から捉え直すとき、ユニアを証人の役割を引き立てる人物として新たに見出すことができる。

ユニアの信仰の揺らぎは〈あの人〉から与えられる召命の揺らぎと換言できる。以下の場面が示すように、ユニアは小説冒頭で〈あの人〉から召命を受ける。

——お前はあの女のように石の原をさまよっているのではない。まだお前の近くに神殿があるではないか。盲や足跛あしなえや癩病患者には、心に激しい光が当たっている。貧しい家族や春をひさぐ女たちも同様だ。お前も今その恵みを受けたのだ。

——恵み……。私はこんなに苦しいめにあったことはありません。私も盲になるのでしょうか。

——必要なら、血の眼は潰れるだろう。それがなんであろう。お前には召命があったのだ。ユニア、荒野へ行くな。帰ってキトーラの人々のために働け。神殿の腐りを切り取れ。　（「ともに在りし時」、21頁）

使徒行伝でサウロに召命が与えられる場面がモチーフであり、サウロがキリスト教徒迫害者から伝道者へ歩みを転回したように、荒野へ赴くことを志していたユニアには自身の意志とは真逆の方向が示される。この召命は小説の展開が進むにつれて揺らぎ、特に〈あの人〉の処刑後にユニアは再び荒野へ赴く意志を告白する（「その血は我に」、239頁）。ユニアが荒野へ赴くことを志す背景には小説の舞台キトーラと荒野の対照的な関係があり、これらの小説の筋を活かすための舞台設定は聖書を題材にしている。

例えば、『或る聖書』の舞台都市キトーラでは聖職機関をはじめ都市全体が根本的な改革の必要に迫られている。キトーラの描写は登場人物の視点に限られているが、一様に頹廢した都市という認識が示されている。ユニアはキトーラを「地獄」と表現し、苦しみや疫病の蔓延で心の支えを失う人々が多いと述べている（「ともに在りし時」、17頁）。また、〈あの人〉を裏切る弟子のアシニリロム

ゾは「風の死ぬ場所」と表現してキトーラの頹廢を皮肉っている（「なぜ我を棄てたまいしか」、96-97頁）。さらに、荒野の声はキトーラの聖職機関の組織的な墮落を糾弾している（「その血は我に」、206-210頁）。キトーラには紀元後1年から30年のパレスチナ近辺の都市の雰囲気を重ねられている一方で、作中では都市の頹廢や墮落の様子が強調されている⁽²²⁾。

また、荒野は都市の外縁という地理的位置を意味するのみならず、荒野の声を指導者とする荒野衆会の拠点も意味している。荒野衆会はキトーラの急進的な改革を目指す集団であり、預言者イシュアの教えを信奉している。荒野衆会はユダヤ教の諸派の一つである熱心党がモチーフと考えられる一方で、洗礼者ヨハネがモチーフとされるイシュアと関連しているため、二つのモチーフが組み合わさっている⁽²³⁾。そして、荒野ないし荒野衆会は頹廢や墮落からキトーラを救おうとする者の集いである点でキトーラと対照的に描かれている。

「荒野へ行くな」と召命を受けたユニアは、〈あの人〉の処刑後に弟子達が荒野衆会に参加する中で自身も荒野へ行く誘惑に駆られる（「ともに在りし時」、235-239頁）。このユニアに対して名もなき証人は〈あの人〉が復活したことを告げて、ユニアに与えられた召命を確信に導く。この証人の役割には前章で検討した『或る聖書』における小川の「模索」の力点が背景に考えられる。そして、小川の「模索」が小説の構造に具体化しており、この小説の構造が名もなき証人の役割を支えていることを分析することで、この証人が小説全体において持つ重要な位置が明らかになる。

そこで、次に名もなき証人の役割を支える小説の構造を具体的に分析したい。

2. 複層的構造の分節化

a. キリストの言葉のアフォーリズム的な使用

名もなき証人により〈あの人〉とキリストの関連が明らかにされる一方で、『或る聖書』の全体を通しては〈あの人〉とキリストの関連は曖昧にされている。すでに前章で言及したように、『或る聖書』における小川の「模索」は名もなき

証人の役割を支える小説の構造において具体化している。この構造の一つにキリストの言葉のアフォーリズム的な使用が挙げられる。そして、次項で示すように〈あの人〉の否定的な像の前景化もこの構造のもう一つの層であると分析できる。本稿ではこれらの構造を名もなき証人の役割を支える小説の複層的構造と称して、はじめにキリストの言葉のアフォーリズム的な使用を分析したい。

キリストの言葉のアフォーリズム的な使用は〈あの人〉が処刑される小説の後半に集中しており、特に荒野の声とイシュアの発言にみられる。例えば、荒野の声の場合、〈あの人〉の弟子の一人であるコイラに対して「お前は滅びた。友のために命を捨てるほど大きな愛はない。お前がこれから闇に住むとしても、お前は偉大なことを成し遂げた」と語る場面が挙げられる（「その血は我に」、195-196頁）。これは「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（「マタイによる福音書」、15章13節）というキリストの言葉の引用だが、荒野の声がコイラを教え諭す文脈で用いられている。さらに、この引用は「お前がこれから闇に住むとしても、お前は偉大なことを成し遂げた」という荒野の声の主張の正当化に援用されて、〈あの人〉と無関係な言葉となっている。荒野で生活するコイラはキトーラにいる息子に対する未練から葛藤する中でこの荒野の声の発言を聞き、慰めを受けて「あなたを信じます」と荒野の声に向かって信仰告白をする（「その血は我に」、196頁）。キリストの言葉は〈あの人〉と無関係な文脈に置かれてアフォーリズム的に使用されており、荒野の声の主張を補強すると同時に〈あの人〉とキリストの関連を曖昧にしている。

また、イシュアの場合もキリストの言葉がアフォーリズム的に使用されて〈あの人〉とキリストの関連を曖昧にしている。イシュアはすでに没している人物であり、作中で他の人物がイシュアの言葉を想起するという仕方で登場する。例えば、〈あの人〉の処刑後に荒野衆会と結託したアニノミラビが司祭長暗殺に失敗して現場で死につつある場面で、次のようにイシュアの言葉を想起する。

諦めて横になると、神殿の壁が見え、〈キトーラよ、予言者を次々と殺

し、お前に遣わされた人々に石を浴びせる者。鳥が雛を羽の下に集めるように、私はお前の子供を集めようとした。今もそうしようと思っている。しかし、お前は応じなかった。見よ、お前たちの家は荒れすたれてお前たちに残る。私は神の家で死ぬのではない。私の命は荒野で絶える」というイシュアの最期の言葉を一字一句も違えずに、思い浮かべた。
 (「その血は我に」、205頁)

ここには「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった」(「マタイによる福音書」、23章37節)というキリストの言葉が引用されている。このキリストの言葉は「イシュアの最期の言葉」としてアフォリズム的に使用されて、イシュアの最期と重ねることで暗殺計画に加担した末に死につつあるアニノミラビの境遇を正当化することに用いられている。このことから、同場面ではイシュアが存在が強調される一方で、キリストの言葉は〈あの人〉とキリストの親和性を低下させている。この点は、イシュアの言葉を想起したアニノミラビが「その日が来たのか、敷石が濡れている、こんなに濡れている、イシュアよ、あなたの日が来ました」と語り、イシュアに祈りを捧げる描写にも表れている(「その血は我に」、205頁)。キリストの言葉はアフォリズム的に使用されることでイシュアの実在感の強調につながるが、〈あの人〉を描き出していない。

イシュアの事例は他にも〈あの人〉の弟子の一人であるカミに関して挙げられる。カミはアニノミラビの加担した暗殺計画後に「なぜか民衆の間には、〈あの人〉の弟子たちはやがて司祭長を殺すに違いない、という考えが残った」という状況が生まれたため、自身の安否を危惧して荒野集会に参加するかで葛藤する。(「その血は我に」、210頁)。このカミに対して次のようにイシュアの言葉が告げられる。

イシュアという言葉が慰めのように聞えて来た。

——狐には穴がある。空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕するところがない。空の鳥を見よ。彼らは種まくことなく、刈ることなく、倉に収めることもないのに、お前たちの神はこれを養いたまう。お前たちは、何を食い、何を飲み、何を着ようかと思って心をわずらわせるな。

——そうですか、あなたのようにになります、とカミは応えた。

(「その血は我に」、212-213頁)

ここには二つの聖書箇所があわせて引用されている(「マタイによる福音書」6章26-31節、8章20節)。聖書で「人の子」はキリストを指すのに対して、この言葉の組合せにおいて「人の子」は語り手であるイシュアを指している。そして、キリストの言葉は「イシュアという言葉」となって、葛藤するカミに行くべき方向を告げ知らせるアフォリズム的な言葉として使用されている。引用される聖書箇所には山上の垂訓が含まれているため他の聖書箇所と比べていっそう〈あの人〉とキリストを結びつけて読みやすいと考えられるが、アフォリズム的な使用が先行して両者の関係はむしろ曖昧になっている。この結果、同場面においてもイシュアの存在が強調されて、カミはイシュアという言葉を受けて「あなたのようにになります」と語り、〈乳の市の歌〉という賛歌をイシュアに捧げる(「その血は我に」、234頁)⁽²⁴⁾。

これらのキリストの言葉のアフォリズム的な使用は前章で検討した小川の「模索」に関わる。つまり、このようなキリストの言葉の使用はキリストと切り離された聖書の用法と類似している。例えば、荒野の声の場合、引用されるキリストの言葉は〈あの人〉を描き出すことに用いられるのではなく、荒野の声の主張を正当化するために使用されている。また、イシュアの場合、特にカミに語られる言葉に引用されているキリストの言葉は一般的にも人生訓や格言と受け止められやすい聖書箇所であり、カミに語られる言葉においてもアフォリズム的な使用が

みられる。小川は人生訓や格言のように聖書が用いられることと対比させて聖書を通したキリストを捉える視点を強調しており、この小川の「模索」はキリストの言葉のアフォリズム的な使用に具体化されていると考えられる。

本項の分析に加えて、名もなき証人の役割を支える小説の構造として〈あの人〉の否定的な像の前景化が挙げられる。〈あの人〉の否定的な像の前景化はキリストの言葉のアフォリズム的な使用と組み合わせ、〈あの人〉とキリストの関連を曖昧にさせる一方で、名もなき証人の役割を支えている。そこで、次に〈あの人〉に対して否定的な登場人物の視点から描かれる〈あの人〉像を整理して、名もなき証人の役割の分析に進めたい。

b. 〈あの人〉の否定的な像の前景化

〈あの人〉の否定的な像の前景化は『或る聖書』に登場するアシニリロムゾと汚鬼の視点により構成されている。勝呂の指摘するように「ユニアと対照的な弟子にアシニリロムゾがいるが、これはイエスを裏切る男イスカリオテのユダを置いて考えられない」と言える（勝呂、1998年、27頁）。また、汚鬼はサタンがモチーフと考えられ、『或る聖書』では〈あの人〉に反発する存在として描かれている⁽²⁵⁾。キリストの言葉のアフォリズム的な使用が〈あの人〉とキリストの関連を曖昧にさせる中で、アシニリロムゾや汚鬼の視点により〈あの人〉の否定的な像が作中で前景化することで〈あの人〉とキリストの関連がより曖昧になる。

例えば、アシニリロムゾの場合、〈あの人〉はアシニリロムゾを裏切り者にさせる人物として繰り返し描写される。〈あの人〉は晩餐の場面で「この男を見よ。私たちの端でうろうろしている男を。なにも迷うことはない。心を定めて私を売ればいい…… [略] ……この席にある全ての眼は見ておくがいい、私たちの畑に、ひそかに伸びた毒麦を」とアシニリロムゾに対して語る（「なぜ我を棄てたまいしか」、78-79頁）。聖書ではイスカリオテのユダと関連した「毒麦」の用例はみられないが、ここではアシニリロムゾの裏切りを批難する文脈で引用されている。そして、「毒麦」と発言した〈あの人〉はアシニリロムゾの視点により次の

ように描写される。

——もう歩けない。終わりはまだか、という〈あの人〉の音が聞こえたようだった。

アシニリロムゾは〈あの人〉との一体感にしばらく浸った。

——どこまで行っても、私はあなたの道具です、と小声で呟き、彼は動かない笑いを浮かべたまま、和んだ気持になった。

しかし、すぐにそれは破られ、とめどもなく硬い顔になって行った。〈あの人〉は俺が馴れるのを許さない、と思えたからだ。

——お前は毒麦だ。

その声は、アシニリロムゾの〈あの人〉に打ちとけたい気持を、どこまでも阻んでいた。胸にこびりついている声だった。アシニリロムゾの気持は、またゆずることができなくなっていった。

（「なぜ我を棄てたまいしか」、138-139頁）

「お前は毒麦だ」という〈あの人〉の発言はアシニリロムゾの視点において元の発言より反発の意味が強められている。また、「私はあなたの道具です」にみられるアシニリロムゾの信仰心を断ち切る一言として「お前は毒麦だ」が引用されており、アシニリロムゾを裏切り者に仕立てた〈あの人〉像が示されている。この場面の他、アシニリロムゾは〈あの人〉を仲間に売り渡す場面においても「結局は〈あの人〉に味方するつもりでいた。しかし、もう弁解はできないようなことになって行くだらう。そうならざるを得ないように、〈あの人〉がしてしまったからだ」と発言しており、〈あの人〉の否定的な像が強調されている（「なぜ我を棄てたまいしか」、80頁）。

また、汚鬼の視点において〈あの人〉は神と偽って人々を騙した人間であり、無責任で不正直な人物として描写される。汚鬼は〈あの人〉の処刑後にユニアに対して「若いの、お前は考えるのを止めて、主よ、主よ、と嘆いていたが、こう

なったら、考えようじゃないか」と語りかけて、処刑前の〈あの人〉の言動に解釈を加える（「その血は我に」、245頁）。この中で汚鬼は「要するにあいつは、33年かかって、いわば一生を賭けてやっと悟った過失を、お前に伝えたかったのだ」とまとめて、〈あの人〉を不正直で分裂した人格の持ち主であると断定する（「その血は我に」、246頁）。汚鬼の視点において〈あの人〉は人間であり、さらに、自身を神と同一視したことで孤独に死んだ人物として描写されている。

このような〈あの人〉の否定的な像はキリストの言葉のアフォリズム的な使用により〈あの人〉とキリストの関連が曖昧にされる中で、さらにその曖昧さを促進させている。たしかに、ユダやサタンをモチーフとした人物らにより〈あの人〉が否定的な視点から描写されること自体は聖書の世界の拡大や変形を試みる「第1の筋」の物語に要請された帰結である。しかし、アシニリロムゾの視点の描写が『或る聖書』全体の約三分之一を占めている点は着目に値する⁽²⁶⁾。なぜなら、キリストの言葉のアフォリズム的な使用とあわせて〈あの人〉の否定的な像を前景化させることで〈あの人〉とキリストの親和性を一段と低めて、これによって名もなき証人の役割を引き立てるという作品の構造が考えられるからである。このことから、キリストの言葉のアフォリズム的な使用とともに〈あの人〉の否定的な像の前景化は名もなき証人の役割を支える小説の構造と考えられる。

このように『或る聖書』が構造的に持つ二つの層を本稿では複層的構造と称する。そして、この複層的構造は〈あの人〉を描き出す名もなき証人の役割を引き立て、支えている。次に、この証人の役割について複層的構造と『或る聖書』における小川の「模索」を含めて考察したい。

3. 名もなき証人の役割

名もなき証人は小説末尾に登場してユニアに〈あの人〉が復活したことを告げる。この証人は自身について「お弟子とも呼べない末の末の一人です」と語る他は名も明かさず、処刑された後に復活した〈あの人〉を語ることに集中している（「その血は我に」、259頁）。この証人のモチーフはエマオに向かう途上で復活し

たキリストと出会う弟子であるクレオパが考えられるが、『或る聖書』では改変が目立つ⁽²⁷⁾。そして、この改変は〈あの人〉とキリストの関連を明らかにする証人の役割につながり、聖書にモチーフを持つ他の登場人物にはみられない特徴と言える。

この特徴として聖書の一場面が証人の経験として引用されていることが挙げられる。具体的には、ルカによる福音書における復活したキリストと弟子の出会いの場面が復活した〈あの人〉と出会う証人の経験として語られている。すなわち、「ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから60スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話合っていた…… [略] ……イエス御自身が近付いて来て、一緒に歩き始められた」（「ルカによる福音書」、24章13-15節）という場面が、証人の発言において次のように引用されている。

わたしたちが村からキビヒロエへ行く道で泣いていますと、旅人がそれを見て、近づいて来ました。背の高い男の人でした。その人は、何を泣いているのか、と尋ね、しばらくわたしたちのそばに佇って待っていました。が、キビヒロエへ行くのだろう、日が暮れないうちに着かなければ、と促しました。わたしたちは立ち上がり、その人と一緒に歩きました。

（「その血は我に」、261頁）

聖書と『或る聖書』の記述を比べて、復活の出来事を語る人称が変化している点が重要である。つまり、聖書では三人称で語られる場面が『或る聖書』においては証人の経験として一人称で語られている。この人称の変化は語り手である証人の内面に焦点を当てることを可能にしており、証人は〈あの人〉の死に関する心の動きを織り交ぜて〈あの人〉の復活を述べている。例えば、「わたしたちが村からキビヒロエへ行く道で泣いていますと」という箇所には、これに先立って「主よ、あなたの死がわたしを浸してきます。杭に吊られるのもいい、わたし

も死なせてください…… [略] ……残りの命は、私にとって何でしょう」とあることを受け、〈あの人〉を失ったことに対する証人の悲しみや嘆きが表されている（「その血は我に」、260頁）。この嘆きの告白は聞き手であるユニアに「私は影です。消して下さい。消して下さい」という自身の〈あの人〉に対する嘆きや悲しみを想起させる（「その血は我に」、261頁）。このようにルカによる福音書における復活したキリストと弟子の出会いの場面が証人の経験として引用されることで、証人とユニアの内面を通して立体的に〈あの人〉とキリストの関連が描かれている。

さらに、『或る聖書』独自の場面が証人の語りに挿入されることで〈あの人〉とキリストの関連が示されている。例えば、〈あの人〉から「お前たちはもう悲しんでいないが、悲しみ迷っているものがある。ユニアは私の杖を仰いで、空しく眼を離し、心を無の中に迷わせている。あの若者に会ってくれ」という指示を受けたことを伝えた後で、証人は次のように〈あの人〉について語る（「その血は我に」、263頁）。

わたしは、ユニア様にお会いしてどういったらいいのでしょうか、と聞きました。すると〈あの人〉は、私を待つようにとだけいってくれ、とおっしゃいました。どこでお待ちしたらいいのでしょうか、と聞きますと、女よ、私はいつでもどこへでも行くことができる、ユニアは一つところに留まっていなくていい、私の言葉を思い起こしながら待っていればいい、とおっしゃったのです。 （「その血は我に」、264頁）

この場面で〈あの人〉とキリストの関連について重要な点は「どこでお待ちしたらいいのでしょうか」という証人の問いとそれに対する〈あの人〉の返答である。証人の明らかにする〈あの人〉は「いつでもどこへでも行くことができる」存在であり、また、「私の言葉を思い起こしながら待っていればいい」と述べられることでその存在と言葉が結ばれている。すなわち、〈あの人〉と〈あの人〉の言

葉は切り離せず、常にその言葉と共に在ることが示されている。このことから、証人の示す〈あの人〉にはインマヌエルの神であるキリストが重ねられていると考えられる⁽²⁸⁾。

これらの特徴は〈あの人〉とキリストの関連を明らかにする証人の役割に関わっており、特にこの人物の名が明かされない点に証人としての役割が象徴的に示されている。なぜなら、証人の名が明らかにされないことで、語る主体ではなく語られる内容そのものが印象付けられるからである。実際、証人はユニアに対して「主は私を証人に選んでくださったのだと思います」と述べて、〈あの人〉の弟子の一人であることよりも証人としての立場を強調している（「その血は我に」、265頁）。また、ユニアやアシニリロムズをはじめ、作中で〈あの人〉の弟子の名は明らかである中で弟子の一人であるこの証人の名が明かされないという設定もこの演出を引き立てている。

このように、〈あの人〉とキリストの関連は名もなき証人によって明らかにされる。そして、前節で分析した本小説の複層的構造はこの証人の役割を引き立て、支えていると考えられる。なぜなら、アフォリズム的なキリストの言葉の使用と〈あの人〉の否定的な像が作中で〈あの人〉とキリストの曖昧さを演出することで、小説末尾における名もなき証人の登場が両者の関係を明らかにする唯一の糸口として際立つからである。また、このように複層的構造が証人の役割を引き立たせている点には『或る聖書』における小川の「模索」が反映されていると考察できる。換言すれば、小川の問題視するキリストと切り離された聖書のアフォリズム的な用法が作品の構造として小説に取り入れられることで、『或る聖書』ではキリストを指し示す聖書の用法として証しが強調されていると言える。これは証人の経験として一人称で語られるルカによる福音書の場面がアフォリズム的なキリストの言葉の使用に反照して鮮やかに〈あの人〉を描き出し、また、この証しが小説全体に漂う〈あの人〉の否定的な像を払拭することに表れている。この場面には古今東西にみられる格言と並ぶアフォリズム的な聖書の用法から、伝道の原風景とも言える証しの現場における聖書の用法へ読者のまなざしを

向けさせようとする小川の意図が考えられる。

本稿の考察を踏まえて、『或る聖書』はユニアの召命物語という小説の解釈のみならず、名もなき証人による証しの物語と読み解くことができる。たしかに、この証人の登場は小説末尾まで待たなければならないが、小説全体に取り入れられた複層的構造は証人の役割を支える点に集中している。そして、ユニアに与えられた召命は証しを通して〈あの人〉と全く新たに出会うことで確信に変わる。このとき、すでに小説冒頭でユニアに与えられていた「荒野へ行くな」という言葉をユニア自身が繰り返す点に本小説を通して証しが強調されていることが象徴的に表れている（「その血は我に」、264頁）。なぜなら、ここで証しは証人の言葉を通して証しの聞き手であるユニアが「荒野へ行くな」という言葉と共に〈あの人〉がいるという実態に立ち返る経験をも含んでいるからである。ここには聖書のアフォリズム的な用法と対照させて、キリストを指し示す聖書の用法によって与えられる信仰の芽生えが重ねられていると言える。本当の意味でのユニアの信仰の歩みは小説末尾における証しを聞くことに始まり、この点で『或る聖書』は名もなき証人による証しの物語と読み解くことができる。そして、それは『或る聖書』を通じた小川の方法による読者に向けた聖書への導きでもある。

VI. 結び

本稿はキリスト教文学研究の近年の動向および山形による類型と「模索」概念を整理した上で、『或る聖書』の複層的構造に支えられる名もなき証人の役割を論じた。

はじめに、1章ではキリスト教文学研究の近年の動向および山形による類型と「模索」概念を整理した。機関誌『キリスト教文学研究』における欧米文学や日本文学を対象とする研究を参照して、特に近年の研究動向ではキリスト教文学が独自に持つ文学的意義について関心が高まっている点を確認した。そして、キリスト教文学として文学作品を研究するための観点として、山形の類型や論考を用いてキリスト者作家の「模索」概念を検討した。

次に、2章では小川文学の特徴と小川の教会との関わりを考察した。小川は初期の創作から聖書を題材とした小説の執筆を志しており、キリスト教を日本社会に異質なものとして取り上げる日本の近現代文学の傾向と異なる点を示した。そして、この背景として小川が作家活動を始める以前から積極的に教会と関わっている点を挙げて、特に小川が教会において聖書理解を培ったことと小川文学の特徴の関連を考察した。

そして、3章では『或る聖書』における小川の「模索」を検討した。「〈あの人〉そのものを描き出そうと思った」という試みが〈あの人〉とキリストを重ねて描くことを指す点を確認した上で、キリストの言葉のアフォリズム的な使用が〈あの人〉とキリストの関連を曖昧にすることを考察した。そして、『或る聖書』執筆前後の時期における対談やエッセーを参照して、〈あの人〉を描き出すことを通してキリストを指し示す聖書の用法を探究することが『或る聖書』における小川の「模索」であることを示した。また、この「模索」の力点が証しに置かれており、〈あの人〉とキリストの関連を明らかにする証人の役割を支える小説の構造が分析できる点を指摘した。

最後に、4章では『或る聖書』の複層的構造に支えられる名もなき証人の役割を分析した。はじめに、ユニアの信仰の揺らぎを『或る聖書』の舞台設定である都市キトーラと荒野の対照的な関係と関連させて考察した。次に、本小説の複層的構造をキリストの言葉のアフォリズム的な使用と〈あの人〉の否定的な像の前景化に分節化して、それぞれ具体的に分析した。そして、これらの複層的構造が〈あの人〉とキリストの関連を曖昧にさせることを確認して、名もなき証人の役割を考察した。ルカによる福音書における復活したキリストと弟子の出会いの場面が証人の経験として一人称で語られる点やインマヌエルの神であるキリストと重ねて〈あの人〉が描写されていることを示して、小川の「模索」の力点が証しに置かれていることを考察した。

本稿は、青年ユニアの召命物語という従来の『或る聖書』の解釈に対して、キリスト者作家として小川が抱いた問題意識に焦点を当てて論じることで、小説末

尾に登場する名もなき証人を中心として物語を読み解く新たな視点を提示している。また、作者による聖書のアフォリズム的な用法に対する警戒がどのように作品に反映されているかを分析することで、作品構造の捉え方が明らかになることも示している。この点はキリスト教文学研究の手法により見出すことのできた文学的意義であり、キリスト教文学研究が文学研究に対して持つ意義や可能性を示していると言える。

ただ、本稿の課題として小川と教会の関わりについてより多くの資料を参照して考察する余地が残されている。また、歴史的ないし社会的文脈から本小説を捉える観点が弱いため「模索」に焦点を当てる本稿の方法論にも検討が求められる。さらに、『或る聖書』において示される〈あの人〉像はキリストとの関連においてインマヌエルの神の面が認められるが、一方で十字架の赦しや贖いの観点がみられない点についても検討が必要である。これらの考察によって小川のキリスト教理解ないし小川文学の特徴をさらに批判的に捉え直すことができると考えられるが、今後の課題としたい。

注

- * 本稿では文学作品を引用する際には題名ないし章題と頁数を示し、聖書の引用は章節を付記する。また、本稿では……および〔 〕は本稿筆者による。この他、小川テキストのうち『或る聖書』は筑摩書房刊行本を底本として、引用に際して年数を割愛する。
- (1) 山形は小説の構造に着目して「混在する視点」という観点から本小説を分析している。詳しくは山形(1989)を参照せよ。
 - (2) この他、他の小川テキストと比較する視点から『或る聖書』を分析した論考として、西谷(1998)を参照せよ。
 - (3) 「模索」は山形によるキリスト教文学研究上の観点の一つである。詳しくは本稿II章を参照せよ。
 - (4) この関心は日本人論の興隆を背景とした1980年代の研究動向にもみられる。例えば、田辺保は日本語に関する批判をもとに「内密な心の秘所へと参入できる、共感と直観をさそい出す文体技巧」を日本語の本領と定義して、この技巧を用いて神の愛への類比を呼び覚ます文学作品にキリスト教文学の独自性を見出している(田辺、1988年、58-67頁)。

- (5) 例えば、小野功生は出エジプト記の文脈と対比させることで『失樂園』(Paradise Lost)の主題を明らかにしている(小野、22-34頁)。また、田辺は『ゴドーを待ちながら』(Waiting for Godot)を取り上げて『パンセ』(Pensées)の思想と関連させて同作品にみられる登場人物の姿と信仰者の姿を重ねて考察している(田辺、1983年、3-15頁)。この他、「接面領域」(Interface)に関してはWalter(1977)を参照せよ。
- (6) この類型は後年の山形の研究にも用いられている。詳しくは山形(2003)を参照せよ。
- (7) この他、キリスト者作家以外の文学作品もキリスト教文学に含まれるという主張がある。近年の論考では佐藤(2013)や柴崎(2016)を参照せよ。
- (8) 日本文学に直接適用するのが難しい項目として(2)Bが挙げられる。例えば、「文学はキリスト教にとって代ったと考える」という項目は日本のキリスト教文学に関する批評から導き出すことは難しいと考えられるため検討が必要である。
- (9) 山形の類型は「キリスト教芸術は「回答」である」というマルローのキリスト教芸術に対する理解を批判的に捉え直している(山形、1986年、11頁)。
- (10) アメリカの文学者リーランド・ライケンはキリスト教芸術家と作品の題材について「キリスト教芸術家がキリスト教的といえるのは、題材によってではなく、その題目にむけた視座による」と指摘している(ライケン、317頁)。ライケンの主張する「視座」は芸術家がキリスト教の観点からいかに題材を扱うかを問題にする点で「模索」の概念と類似している。この他、文学と神学の関わりをテーマにした研究についてはTerence(1988)を参照せよ。
- (11) 『IL』に登場するキリストの分析については、『ICU 比較文化』第49号所収の拙稿「人間へのまなざし——集大成としての金子光晴詩集『IL』の一考察」を参照せよ。
- (12) この他、山形は小川の短編「天の本国」を取り上げて「作品世界に〈神の王国〉を導入する方法を巧みに暗示的に示しえた」と分析して、小川文学においてキリスト教信仰の世界観が積極的なものとして展開されている点を指摘している(山形、2003年、35頁)。
- (13) 久保田暁一は三浦綾子について「明治、大正期のプロテスタントの作家たちがキリスト教から去り、今日でもカトリックに比してプロテスタントの作家が少ない中で、三浦は多数の作品を書き、広く読まれている。また、「キリストの福音」を訴えるために書くと言明する彼女のような作家はこれまでに一人もいなかったし、これからも容易に現れないであろう」と述べている(久保田、19頁)。
- (14) 以下、小川テキストの分析にあたり、「引用」という表現を聖書が題材となっていることを示すために用いる。その際、小川による聖書の文言の改変・要約を含むものとする。
- (15) 小川の教会生活に関する資料は現在も研究領域として課題が多い。例えば、小川の戯曲「ヴァンデの鐘」の謄写版刷りが2016年1月に藤枝カトリック教会の教会員により新たに発見されている(柏崎、『朝日新聞』、夕刊3頁)。
- (16) 以上、小川の伝記に関しては勝呂(2012)を参照した。

- (17) 加えて、静岡市内の県民カルチャーセンター（現・静岡朝日テレビカルチャー）で連続講演「キリストの生涯」を担当した経験など、小川が作家以外の立場で聖書に関する仕事に携わった点も見逃されてはならない。なお、連続講演「キリストの生涯」は『イエス・キリストの生涯』（新教出版社、2013年）に所収されている。
- (18) 小川は『枯木』について「偶然であったが、私は『枯木』のなかで、キリストのことを〈あの人〉と書いた。括弧などつけないで、彼を慕う人々の会話のなかで、そう言わせていた。このことは、この話を連作にして行くために都合がよかった」述べている（小川、1995年、173頁）。
- (19) 例外として、物語の前半にあたる「ともに在りし時」14章ではキリストの言葉の引用が〈あの人〉と一致しているが、これは物語の後半に集中してみられる「連鎖」を効果的に演出するためだと考えられる。
- (20) 鳥尾が信仰の問題として選民思想を挙げることに對して、小川は「ほくが重大視しているのは、やっぱり新約のキリストの陥った状況…… [略] ……キリストの劇というものを如実に感じられるか感じられないかということが、ほくにとってはいちばん大きな関心事みたいです」と述べている（小川、鳥尾、142頁）。
- (21) この他、小川は『私の聖書』（岩波書店、1994年）において小川自身の聖書理解が教会の神父から影響を受けた点について言及している。
- (22) 佐藤研はキリストの活動した紀元後1年から30年のパレスチナ付近の雰囲気について「社会全体が没落解体を予感する中の、終末的旋風であった」と指摘している（佐藤、177頁）。
- (23) 紀元後1年から30年頃までに活動した主なユダヤ教の諸派にはサマリア人、サドカイ派、ファリサイ派、熱心党、エッセネ派の五つがあり、『或る聖書』では熱心党が取り上げられていると言える。聖書と関連させて『或る聖書』を分析した論考では勝呂（1998）を参照せよ。また、イエスの活動した時代に関する概括的な解説としてアリストワー・E・マクグラス、本多峰子訳（2008）とMerrill（2001）を挙げる。
- (24) すなわち、カミは次のようにイシュアを讚美する。「キトーラよ、神殿よ、お前に予言者たちが遣わされたけれど、お前はその或る者を殺し、杭に吊るし、或る者を衆議所で鞭打ち、街から街に追い詰めた。こうして義人ヨアキムの血から始めて、お前が祭壇と市壁との間で切りさいなみ殺したイシュアの血、湖の彼方で蹴り殺したアイロザの血にいたるまで、総て地上で流された正しい血は、お前の上にかかるだろう」（「その血は我に」、234頁）。
- (25) 汚鬼は狼煙と名乗るが、〈あの人〉から「私に齒向かう者は汚鬼だ」と言われて汚鬼という呼称が与えられる（「ともに在りし時」、75頁）。野口誠は聖書におけるサタンについて、旧約聖書では「敵対する者」を表す普通名詞であるが、のちに超自然的存在として神に敵対する者を表す固有名詞となったと指摘しており、汚鬼は聖書における悪魔理解が背景に考えられる（野口、1頁）。
- (26) 三部で構成される『或る聖書』のうち、第二部「なぜ我を棄てたまいしか」はアシニリロムヅによる描写が大部分を占める。また、各部に登場する人物や事象を概括した論考として、山形（1998）を参照せよ。
- (27) クレオパについてはルカによる福音書24章13節以降を参照せよ。

- (28) インマヌエルの神としてのキリストについてはマルコによる福音書1章23節を参照せよ。

参考文献

〈小川国夫テキスト〉

- 『或る聖書』、筑摩書房、1973年
 『私の聖書』、岩波書店、1994年
 『小川国夫全集 10』、小沢書店、1995年
 『イエス・キリストの生涯』、新教出版社、2013年
 『イシュー記 新約聖書物語』、ぶねうま舎、2014年

〈その他〉

- 芥川龍之介「神々の微笑」、『春服』、名著復刻全集編集委員会編、日本近代文学館、1977年、120-141頁
- アリストター・E・マクグラス、本多峰子訳『総説 キリスト教——はじめての人のためのキリスト教ガイド』、キリスト新聞社、2008年
- 岡田理香「[神のいない時代のバイブル・ストーリーズ]に見る無神論的キリスト教作品の意味」、『キリスト教文学研究』第31号、日本キリスト教文学会編、2014年、91-105頁
- 小野功生「[「失楽園」の主題と出エジプト記]」、『キリスト教文学研究』第3号、日本キリスト教文学会編、1985年、22-34頁
- 柏崎敏「小川国夫、デビュー前の宗教劇台本発見——静岡の教会活動で執筆か」、『朝日新聞』、2016年1月12日、夕刊3頁
- 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳』、日本聖書協会、1987-1988年
- 久保田暁一『三浦綾子の世界——その人と作品』、和泉書院、1996年
- 斎藤和明「『或る聖書』の視界」、『キリスト教文学研究』第6号、日本キリスト教文学会編、1989、76-80頁
- 櫻井遼太「人間へのまなざし——集大成としての金子光晴詩集『IL』の一考察」、『ICU 比較文化』第49号、国際基督教大学比較文化研究会、2017年、23-60頁
- 佐藤泰正「キリスト教文学を読む——近代日本という風土を軸として」、『文林逍遙 佐藤泰正著作集12』、翰林書房、2013年、101-113頁
- 、「キリスト教文学の可能性——ひらかれた文学と宗教を求めて」、『文学の力とは何か——漱石・透谷・賢治ほかにもふれつつ』、翰林書房、2015年、283-300頁
- 佐藤研「新約聖書時代史」、山我哲雄、佐藤研編、『改訂版 旧約新約聖書時代史』、教文館、2008年、161-240頁

- 柴崎聰「キリスト教文学はキリスト者のものか」、『福音と世界』2月号、新教出版社、2016年、26-33頁
- 勝呂奏「小川国夫『或る聖書』の世界——作品の構造」、『キリスト教文学研究』第15号、日本キリスト教文学会編、1998年、21-32頁
- .『評伝 小川国夫 生きられる“文士”』、勉誠出版、2012年
- .「解説 小川国夫版《キリスト伝》の最初の試み」、小川国夫『イエス・キリストの生涯』、新教出版社、2013年
- 竹林一志「〈神を指し示す指〉としての三浦綾子文学」、『キリスト教文学研究』第30号、日本キリスト教文学会編、2013年、39-50頁
- .「聖書と三浦綾子文学」、『キリスト教文学研究第33号 創立50周年記念号』、日本キリスト教文学会編、2016年、84-97頁
- 田辺保「「……を待ちながら」の構造と本質——パスカルの『パンセ』とベケットの『ゴドーを待ちながら』をめぐって」、『キリスト教文学研究』創刊号、日本キリスト教文学会編、1983年、3-15頁
- .「日本におけるキリスト教文学の可能性」、『キリスト教文学研究』第5号、日本キリスト教文学会編、1988年、58-67頁
- 鳥尾敏雄、小川国夫『夢と現実——6日間の対話』、筑摩書房、1976年
- 西谷博之「小川国夫『ある聖書』と『王歌』」、『キリスト教文学研究』第15号、日本キリスト教文学会編、1998年、33-43頁
- 森川達也、諸田和治、小川国夫『原体験の周辺』、小川国夫『かくて耳開け——小川国夫対談集』、集英社、1972年、7-74頁
- 森本真一「『オハイオのワインズバーグ』に見る聖と俗と性」、『キリスト教文学研究』第33号、日本キリスト教文学会編、2016年、74-83頁
- 山形和美「文学とキリスト教——ひとつの視座」、『キリスト教文学研究』第4号、日本キリスト教文学会編、1986年、1-12頁
- .「『或る聖書』の構造」、『キリスト教文学研究』第6号、日本キリスト教文学会編、1989年、72-75頁
- .「小川国夫『或る聖書』私論」、『キリスト教文学研究』第15号、日本キリスト教文学会編、1998年、10-20頁
- .「文学とキリスト教」、『キリスト教文学研究』第20号、日本キリスト教文学会編、2003年、29-35頁
- 吉本隆明、小川国夫『宗教論争』、小沢書店、1998年
- ライケン・リーランド『聖書の視点から人間の経験をよむ』、新井明、井上美沙子、林ひろみ、大平栄子、山本優子訳、すぐ書房、1998年
- Merrill C. Tenney, *New Testament Times*, Hendrickson Publishers, 2001

Terence R. Wright, *Theology and Literature*, Basil Blackwell, 1988

Walter J. Ong, *Interfaces of the Word: Studies in the Evolution of Consciousness and Culture*, Cornell, 1977

〈デジタルアーカイブ等〉

小川国夫「小川国夫・カトリシズムと文学」、『国文学——解釈と鑑賞』第46巻10号、至文堂、1981年、138-151頁、国立国会図書館デジタルコレクション (NDLDC) [<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/6059713>] アクセス日時2017年7月28日

吉本隆明、小川国夫「家・隣人・故郷」、『文芸』10巻11号、河出書房新社、1971年、234-254頁、NDLDC [<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/7926774>] アクセス日時2017年7月28日

小川国夫「福音書の理解」、『現代詩手帖』15巻9号、思潮社、1972年、150-151頁、NDLDC [<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/6055816>] アクセス日時2017年7月28日

野口誠「サタン」、『日本大百科全書 (ニッポニカ)』、1頁 [<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000100733>] アクセス日時2017年7月24日

The Role of the Nameless Witness: A Study of the Dual Structures of Kunio Ogawa's *Aru Seisho*

SAKURAI, Ryota

This paper aims to determine the role of the nameless witness who appears at the end of *Aru Seisho* (September 1973), translated as *A Bible* henceforward. *A Bible*, as the title implies, is a literary novel based on the Bible. Since the beginning of his career, Kunio Ogawa (1927-2008) was interested in imbibing biblical stories into his writings. Many contemporary literary critics have analyzed *A Bible* as his primary work with an emphasis on the character, 'Yunia' (ユニア, *Yunia*), who receives a calling from God. However, the nameless witness who renews the faith of 'Yunia' can also be seen to have a significant role. Therefore, this paper examines the influence of the Bible and Ogawa's personal faith on his writings to reveal the significance of the witness, the reasons that the character has no name, and insight into Ogawa's understanding of Christianity.

The first chapter of this paper summarizes major concepts concerning Christian Literature relevant to recent studies on modern Japanese Literature. Christian Literature has been assumed to utilize definitions of Christian terminology and problematic issues of faith that vary dependent on the researchers. This paper uses Yamagata's categorization of terms, which enables a parallel examination of *A Bible* and Ogawa's struggle in his faith. Therefore, the central focus is twofold: to capture Ogawa's conflict with his life as a Christian and to analyze the text of *A Bible* as a reflection of this struggle.

The second chapter of this paper compares characteristics of Ogawa's writings with other Japanese Christian Literature and illustrates his biography

focusing on his Christian faith. In comparison to Shûsaku Endô (1923-1996), the theme of suffering faith does not appear in the works of Ogawa. Instead, the evangelistic nature of his publication draws similarities with writings by Ayako Miura (1922-1999). Although his family was not Christian, Ogawa himself identified as a Christian and served at the church where he gained an understanding of the Bible. Ogawa's literary works are subsumed under his Christian life. Particularly, *A Bible* mirrors his deep interest in his faith and his biblical hermeneutic.

The third chapter of this paper clarifies the thematic elements of *A Bible*. While literary works preceding *A Bible* have directly characterized Jesus Christ as *Anohito* (あの人, 'A man'), Ogawa depicts *Anohito* itself through the voice of the nameless witness in *A Bible*. The use of the witness is a part of the dual structures that gives insight into the silent *Anohito* through a negative image. The other part of the dual structures is *Anohito* and the aphoristic use of the words Jesus found in the Bible. These dual structures blur the depiction of *Anohito* in the story, depending on the role of the witness to clarify the relationship of *Anohito* as Emmanuel, God with us. Therefore, the witness occupies an important thematic position in relation to Ogawa's understanding of the Bible.

The fourth chapter of this paper gives a detailed analysis of the dual structures of *A Bible* and the significance of the witness. The first structure considers the relationship between the biblical words of Jesus and the words of *Anohito*. In *A Bible*, the character of *Anohito* rarely speaks in contrast to Ogawa's preceding works. Instead, the words of Jesus are in the lines of the other characters as aphorisms, which diminish the relationship between *Anohito* and Jesus in the story. The second structure is the indirect portrayal of *Anohito* through the contradictory standpoint of other characters such as the betrayer, named 'Ashiniriromuzo' (アシニリロムゾ, *Ashiniriromuzo*) whose motif is Judas Iscariot.

The silence of *Anohito* within the aphoristic appearance of the biblical words of Jesus and his negative depiction through the lens of supporting characters point to dual structures that diminish the direct connection of *Anohito* as Jesus in the story, requiring a closer examination of the nameless witness to draw out the nature of *Anohito*. The witness evokes *Anohito* as Emmanuel, God with us and is the only character to have no name. The namelessness of the witness places emphasis on the testimony as opposed to the one bearing witness, strengthening the connection of *Anohito* to Jesus. Comparison with the witnesses on the road to Emmaus in the Gospel of Luke further reinforces the significance of the nameless witness in explicating the character of *Anohito* in *A Bible*.

Parallel examination of *A Bible* with a focus on the witness and Ogawa's struggle with his faith in this paper shows the significance of theological interpretation in considering Ogawa's understanding of the Bible and Christianity as influences on his writings. The paper also suggests further analysis of Ogawa through a critical and detailed view of his Christian life and textual reading as future tasks of study. In regarding these tasks, this paper proposes some directions of the future mission of Christian Literature.